（別紙 2）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　新　井　慧　誉

『父母恩重経』は、中国で成立したいわゆる偽経に属する仏教経典であるが、父母の恩を説くというその内容が民衆教化に用いられ、東アジアに広く普及した。それだけに、写本・刊本など多数にのぼり、内容的にもさまざまに増広や変容を被り、複雑な発展をしてきた。しかし、正統的な仏教教理から外れるため、従来まとまった研究がなかった。新井慧誉氏の論文「『父母恩重経』諸本の研究」は、このような『父母恩重経』を正面から取り上げ、多数にのぼる写本・刊本を比較対照して本文を校合し、それら諸本の関係を明確にしたものであり、今後の『父母恩重経』研究の基礎となる成果である。

本論文は序論と本論からなる。序論は『父母恩重経』という経典についての概観的な研究であり、特に「恩」という概念が仏教でどのように発展してきたかを明らかにしている。本論は 3 章よりなるが、その中心となる第 1 章と第 2 章は、もっぱら多数にのぼる『父母恩重経』の諸本の詳細な紹介と比較研究、そしてその系譜の研究に費やされている。その結果として、著者が明らかにしたことは以下のような点である。

まず、さまざまに展開した『父母恩重経』のもっとも原型となるものは、『丁蘭本』と呼ばれるものであることが明らかになった。『丁蘭本』は敦煌出土の写本が 11 点存する。『父母恩重経』の成立について、従来 695 年成立の経典目録『大周録』高麗本に見えるところから、それ以前と考えられていたが、その記事は竄入の可能性が高く、確実なのは 730 年成立の『開元録』である。従って、その成立は 695 年から 730 年までと考えられ、それが『丁蘭本』であったと考えられる。『丁蘭本』は、丁蘭等、中国の孝子の名を挙げるところから、すでに『開元録』から偽経と見られていた。このために、本経は大蔵経に入れられることはなかったが、中国の恩の思想を取り入れ、庶民に広く普及することになった。

次に、本経の系統には 2 つあることが明らかにされた。第 1 は、著者が「恩重経系」と呼ぶ系統で、『丁蘭本』に由来し、それを改訂したものである。これには、『古本』『報本』『増益本』の 3 種類がある。『古本』は、敦煌本 33 点、七寺本 1 点の計 34 点が確認されている。『報本』は、四川省安岳県臥仏院の石壁に刻された 2 点（735 年刻）で、破損が著しいが、古本と近いものであると確認された。経名が『仏説報父母恩重経』とあるところか

ら、『報本』と呼ぶ。『増益本』は、高麗に由来する写本１点と日本の刊本１点、註釈を施されたもの１点の計３点が残され、『丁蘭本』をもとにして増広されている。

もうひとつの系統は、著者が「大報経系」と呼ぶもので、『大報経』(『大報父母恩重経』)を典型とするもので、恩重経系をベースにしながらも、説き方が大幅に異なっている。その最も原型に当たるものは、著者が『報原経』と呼ぶものであることが明らかにされた。これは敦煌本など４点の写本が現存し、800年には成立していたと考えられる。その後、朝鮮本・日本本など、さまざまなヴァリエイションをもって広く普及した。

以上のような諸本の比較とその系統付けが本論文の中心であり、著者は多数に上る写本を細かい文字の異同にまで注意を払って、校合の作業を行なっている。さらに、第３章においては、視野を広げ、パーリ語経典やチベット語経典などまで渉猟して、仏教において恩を説くさまざまな経典と『父母恩重経』の比較を行なっている。

このように、本論文はその題目どおり、『父母恩重経』の諸本を可能な限り収集し、詳細に検討したもので、本経研究にかけた著者の熱意とその労力は驚異に値する。本論文をまって、はじめて『父母恩重経』は学問的に扱うことが可能になったといって過言でない。もっとも、その諸本研究に全力を傾けたため、思想内容の分析にまで十分及ばず、その点不満が残るが、それは今後の著者に課せられた課題であろう。

以上のような点から、審査委員会は本論文が博士(文学)を与えるにふさわしい成果であると判断した。